

おじいさんおばあさんへ

三 春

庭向こうに住む兄から電話がかかってきた。私宛の荷物を預かっているという。

はてな、通販で何か注文した覚えはないし、このところ留守にしてないのに……と思いつつ取りに行った。

その包みに添えられたカードには「おじいさんおばあさんへ」とある。近所の開桜小学校生徒の幼い鉛筆書きで感謝(?)と励まし(?)の言葉が数行。つまり、「敬老の日」の贈り物を町会の担当者が届けてくれたのだ。歳に不足はないのだから「おばあさん」であることは間違いないが、孫もないせいかどうもピンとこない。でも、そんなことはどうでもいい、何才になろうと贈り物は嬉しいに決まっている。

いそいそと包みを開けると「羽田 大谷政吉商店」とやらの佃煮セットが現れた。創業一三〇年以上の老舗らしい。若炊あさり、胡桃しらす、あみ、浅炊たらこ昆布。そういうば去年は老舗の海苔問屋「松尾」の焼海苔だったし、地元の名産品をと心がけてくれる姿勢は好ましい。

じつを言うと、この地で生まれ育ったくせに地元の小さな名店をあまり知らない。都心の学校や会社を往復するだけの暮らしでは地元への興味や愛着を失いがちになる。幼いときから馴染んでいたのは「餅甚」と「木田屋」くらいのものだ。江戸時代から続く「餅甚」のあべ川餅は、ぎゅっひでも羽二重餅でもなく生餅なのでやわやわポ二ヨポ二ヨ。甘納豆で知られた「木田屋」は数年前に惜しくも閉業したが、「弁天谷口商店」の甘納豆も負けてはいない。

翌朝、たらこ昆布でお茶漬けサラサラしながらふと思った。なぜこれが兄の家に届いたのかと。そこでハツとした。あの前日に見知らぬオバサンが訪ねてきてインターホンを鳴らしたことを思い出したのだ。屋内のモニターに映ったその人は、手にしたメモと表札を見比べながらドアをゴンゴン叩いたりもした。某テレビ局の回し者か宗教の勧誘に違いない、これは居留守コースだなどと、抜き足差し足、息をひそめるようにしてやり過ごしたのだった！ ごめ〜ん